

## 研究交流委員会企画シンポジウム

### 質的心理学は「越境する知」たりえるか：理論という視点から考える

企画者名	東村知子・宮本匠
司会・話題提供	東村知子 京都教育大学教育学部
話題提供	宮本匠 兵庫県立大学
話題提供	室田信一 首都大学東京都市教養学部
指定討論	南博文 九州大学人間環境学研究院

#### シンポジウム要旨

質的心理学に携わる研究者は、自らにとって切実な問題を追求する中で、既存の学問領域の境界を越えた「越境する知」(見田, 2006)を求め、あるいは切り開こうとしているのではないだろうか。この「越境する知」にとって、「理論」は不可欠であると私たちは考える。私たちが取り組もうとする問題の多くは複合的なものであり、さまざまな理論的視点から捉えなければおそらく解けない。

私たち企画者は、これまで哲学や社会学の理論を学び、そうした視点からフィールドの現象を捉えようとしてきた。しかしそのような研究は、ともするとデータを軽視していると見なされ、また自分でも、その理論を使って分析することになんの意味があるのかと疑問を抱くこともあった。そこで本シンポジウムでは、防災、福祉、教育など異なるフィールドに身を置く研究者が、研究における理論の位置付けについて議論することを通して、「越境する知」にとって必要な理論とは何かを、フロアの方々と共に考えていきたい。

#### 質的心理学をめぐる私の問い

東村知子(京都教育大学)

質的心理学には、決まった方法も、誰もが共有している(メタ)理論もない。研究テーマやフィールドもさまざまである。そこが魅力である反面、特有の難しさを生み出しているように感じる。私が学生時代に教員から指導されたのは、哲学や社会学の文献を徹底的に読み込むこと、フィールドに参加することの二つであり、質的なデータをどう分析するかについてはほとんど何も教えられなかった。当然、卒業論文は散々な出来だったが、いま思えば、どんな研究にも適用できる万能な方法なるものは存在せず、方法は自身の問いに格闘する中で自ら生み出さなければならないものなのだということを、身をもって学ぶことができた。では私はどのようにしてデータを「分析」してきたのか。結局私がしてきたのは、データを、これまで読んできた理論の言葉や概念を用いて自分なりに説明する＝語り直すことだったのだと思う。そもそも何かの問題として見えてくるということ自体、そのような理論を学んできたことから切り離すことはできない。ある理論的視点を持ってフィールドに入った研究者が、そこで「問題」を見出し、ある理論を通して考えることで理解できたと感じる。そこまではよいかもしれない。しかしその理解を、同じ理論を共有していない他者に伝えることは可能なのだろうか。たとえ可能だったとして、そうした語り直しはどのような学問的意味を持ちうるのだろうか。本報告では、私自身の経験にもとづき、質的心理学の方法と(メタ)理論、シンポジウムのテーマである「越境する知」について、これまで感じてきた疑問や考えてきたことをお話ししたい。

## 社会福祉学研究者の立場から

室田信一（首都大学東京）

社会福祉（もしくはソーシャルワーク）とは他の学問の理論を参考にしながら発展してきた学問（ないしは実践領域）と言える。なぜなら学問の前提として現場の実践があり、実践に携わる実践者（専門家）の存在があり、その実践を説明し、解釈し、時には批判し、伝達可能かつ応用可能な知識体系として構築してきたものが社会福祉学として体系化されているからである。したがって、社会福祉学にとっての理論とは、社会福祉独自の理論ではなく、社会学や心理学、哲学、教育学、政治学などの他学問における理論を借用してきたものである。

本報告では、第一に、社会福祉学がこれまでに借用してきた主要な理論を整理し、それらの理論を借用する必要性について、社会福祉の歴史とともに振り返る。社会福祉の歴史は専門性の追求の歴史であり、それは科学性の追求の歴史と整理することもできる（三島 2007）。専門性の低さにコンプレックスを抱き、そのために専門性に固執した結果、相反する理論を借用してきたという矛盾した過去がある。そうした経緯を参考に社会福祉学にとっての「理論」の意味を考える。

第二に、日本の社会福祉学が学問としての固有性を追求してきた歴史を「人名理論」と国家資格化を参考に整理する。日本の社会福祉学は過去の研究者の固有名を冠した理論を伝統的に参照しており、それらの理論が追求した固有性について整理する。また、1985年に国家資格として社会福祉士が誕生したことで、全国で養成カリキュラムに沿った教育が提供されるようになった。そのことが学問に与えた影響について検討する。

第三に、2014年に改定されたソーシャルワークのグローバル定義を参考に、社会福祉における専門知の位置付けについて、新定義から新たに加わった在来知との対比で検討する。

最後に、上記の議論を踏まえて、社会福祉学の固有性と社会福祉学に求められる理論について、報告者の見解を述べる。

## アクションリサーチと＜越境する知＞

宮本匠（兵庫県立大学）

社会学は、社会現象のさまざまな側面について、領域横断的に分析し統合する学問、すなわち＜越境する知＞として展開してきたこと。ただし重要なことは「領域横断的」であることではなく、「自分にとってほんとうに大切な問題に、どこまでも誠実である、という態度」であること。それゆえ、「領域横断的」であること、「越境する知」であることを、「それ自体として、目的としたり誇示することは、つまらないこと、やってはいけないこと」であり、「領域横断的」であるのは、本当に切実な問いを追求する結果としてのみあらわれるのだという見田宗介の主張に異論はないだろう。しかし、現象を「知りたい」ではなく、「変えたい」ことを志向するアクションリサーチにおいては、＜越境する知＞は「領域横断的」であるという学問側の境界を越える問題よりも、むしろこれまで知の対象であった人々が知の主体となるという、研究主体と対象の関係における「越境」をどのように捉えるのか、どれだけこの構造に自覚的になることができるのかが重要である。そもそも、人間科学は、人間が人間自身を研究するという広い意味での当事者研究である。人間科学においては、この自己言及の構造のために、「知ること」と「変えること」は不可分の関係にある。だから、人間科学は、多かれ少なかれアクションリサーチとしての性格を有していると言える。このような観点から、本報告では、理論的関心をもった研究者と、現場の実践者がともにリサーチすること、すなわち協働的实践の可能性について考えたい。この協働的实践においては、得られたデータの位置づけ、価値も、「知りたい」をベースに展開してきた従来の科学におけるものとは、全く異なる相貌を帯びることになる。研究主体と対象の関係における「越境」を深く自覚することが、アクションリサーチを賦活する鍵である。